



企画にあたって

小室あゆみ (山口大学大学院医学系研究科器官病態内科学)
奥田真一 (山口大学大学院医学系研究科病態検査学教授)
佐野元昭 (山口大学大学院医学系研究科器官病態内科学教授)

経食道心エコー図検査 (transesophageal echocardiography : TEE) は1970年代に開発され、わが国もその黎明期から大きく貢献してきました。当初は M モード法から始まり、1980年代には2D エコー法やドプラ法が導入され、診断精度と描出能力が着実に向上しました。1990年代には臨床現場で広く普及し、心疾患の診断や心臓手術中のモニタリングに不可欠なツールとして定着しました。21世紀に入ると3D エコー法が登場し、画像の解像度と立体的な構造把握が飛躍的に進化した。TEE の臨床的価値はさらに高まりました。

現在では、TEE は心臓の構造や機能を詳細に評価するための標準的な検査法として広く用いられています。構造的な疾患 (structural heart disease : SHD) の診断はもとより、術者の「もう1つの目」としての役割を担い、TEE は臨床に不可欠な存在となりました。心臓手術や SHD カテーテルインターベンション中のリアルタイムモニタリング、さらには治療方針の決定においても重要な役割を担っています。

本特集「ALL about TEE」は、TEE の歴史的背景から基本的な操作・描出法、そして臨床現場での応用に至るまで、幅広い視点からその魅力と可能性を掘り下げることを目的としています。各項目では、初心者にも理解しやすい基本断面の解説から、安全管理、エキスパートによるこだわりの描出・評価法、さらには術中モニタリングや治療支援における TEE の活用法まで、実践的かつ多角的な内容を盛り込んでいます。

あらためて TEE の歩みを振り返ると、常識や限界にとらわれることなく、未知の領域に挑み続けたわが国の医師たちの情熱が浮かび上がります。臨床の現場に革新をもたらした先人たちの志は、今日の TEE の礎となっています。その歩みに敬意を表しながら、TEE の可能性をさらに広げていく読者の皆様の力となるべく、本特集では、明日からの診療に活かせる知識と技術をお届けします。

本特集が、皆様の診療に新たな視点と確かな手応えをもたらす一助となれば幸いです。